

中学生の「反抗」の真実の姿

——反抗と自立は等価か——

千田 恭平（東京大学教育学部）

◆ 要約

- ◎中学生の保護者に対する「反抗」は何らかの外的要因によって誘発されるものなのではないか、また近年の中学生の反抗は、「抵抗」ではなく自立を伴わない「反発」なのではないか、というリサーチクエスチョンを立てた。
- ◎反抗と自立は一括りで語られることが多く、一方で反抗に影響を及ぼす要因についての研究はほとんどない。
- ◎分析から、反抗と自立心にほとんど関連がない、保護者と話すことは反抗には負の、自立心には正の相関を持つ、などの知見を得た。
- ◎中学2年生のことを表すのに「反抗期」という言葉を使わない、あるいは「反発期」というような別の表現を用いることと、保護者は反抗的態度を取る子どもであってもできるだけ話すよう試みることを、本稿からの社会に対する提言とする。

1 問題設定

本稿の目的は、中学2年生における「反抗」を正しく捉え直すことによって、子どもについてより正しい理解を促すことである。

中学生が保護者を無視したり、保護者に対して反発的な態度を取ったりしたとき、「反抗期」という言葉で説明する、ということが現在子どもを取り巻く環境において多いのではないだろうか。保護者に対する「反抗」というものが、人間の発達段階の1つとしてどの子どもにも訪れるものであり、その過程で自立心が身についていく、という前提を、多くの人が共有しているように思われる。

しかし、実際に間違いなくそうだと言えるのだろうか。確かに「反抗期」は多くの子どもに訪れるであろうが、「反抗」が発達段階

の過程の1つとして以外の側面、例えば保護者からの教育などの外的要因によって誘発されるなどの性質を持っていると考えることもできる。また、西平（1990）は青年期の反抗を、青年期前期の親への単なる「反発」と、青年期後期の親の期待する生き方から自分の生き方への脱皮を目指す「抵抗」に理論的に分類している。近年の中学生における反抗は、「抵抗」ではなく自立を伴わない「反発」なのではないか。

このように考える理由は2つある。1つは、価値の多様化が進んでいる現代において、保護者世代が確固たる思想や信念を持つことが困難になりつつある、ということである。近年の保護者には、良くも悪くも、かつての保護者世代にあった父権主義や国家主義のような確固たる信念がないために、今の中学生は

保護者を批判しても自らの立ち位置を定めることができないのではないだろうか。その結果、反抗が自立と結びつかない漠然とした反発で終わってしまうことが考えられる。そしてもう1つの理由は、「反抗期」という言葉が広く使われていることである。「反抗期」というものが発見された時代においてそれは的確な表現だったのかもしれないが、現代においては「反抗期」という言葉は広く知れわたっており、中学生自身も知っている表現であると言える。「子どもは反抗していく中で自立するようになっていく」という知識を事前に得てしまうことによって、反抗することの働きに自覚的になり、自らの反動的な態度を「これは自立している過程なのだ」と勝手に意味付けしてしまい、逆に「反抗の中で自立していく」という働きが起りにくくなってしまっているのではないか。

以上のような関心から本稿では、まず中学2年生の反抗と自立には明確な関連がないこと、次に保護者による教育がどのように反抗および自立に影響を与えているのかを明らかにし、最後に中学2年生段階における正しい反抗の捉え方を提示する。

2 先行研究の検討

そもそも「反抗期」とは何なのだろうか。本稿で取り扱う反抗は思春期段階のものであり、幼児期における第一反抗期とは区別され、正しく言えば第二反抗期である。第二反抗期は、『発達心理学用語辞典』によれば「それまでの両親への依存から離脱し、一人前の人間としての自我を確立しようとする心の動き」が現れる時期と言える。

次に反抗と自立に関してだが、問題設定の節でも述べたように、西平(1990)は青年期の反抗を、青年期前期の親への単なる「反発」と、青年期後期の親の期待する生き方から自分の生き方への脱皮を目指す「抵抗」に理論的に分類している。しかし、反抗と自立を結びつけて実証的研究を行った例はあまりない。

深谷ほか(2004)では、首都圏の中学生を対象に行ったアンケートの結果から、親子関係が良好になったことで中学生から反抗期が消えてなだらかな成長スタイルが定着したとし、自立を促すために親は弱みを見せなければならぬなどと述べられている。

だが、実際に中学生において自立心がなくなっているかどうかのデータは提示されていない。数少ない研究例として小沢(1991)があり、中学2年時の反抗を経ただけでは自立には至れないということを述べている。しかし、短大生に昔の反抗の状況を振り返ってもらうという調査方法のため、正確なデータが得られているかについては疑わしい。サンプル数も少なく、そもそも短大生を調査対象としているサンプルに偏りがあるため、一般論として語ることはできない。以上の点から、中学生を調査対象にして反抗と自立心の関係を明らかにする本研究は十分に意義があるものとする。

それから反抗に影響を与える教育についての研究であるが、こちらも研究が蓄積されているとは言い難い。範囲を広く取り、中学生にどのような教育態度がどのような影響を与えているのか、という研究であればいくつか存在する。中学生の自己実現が父親の自己実現の生き方や母親の情緒的なサポートから影響を受けているとする小坂・山崎(2002)¹⁾や、親子間での相互の信頼性が低い家庭の子どもは学校に不適應な傾向があるということを明らかにした酒井ほか(2002)²⁾、過去も現在も一貫して父親が家庭に関与することが中学生の精神的健康にとっては望ましいと考えられると述べた平山(2001)³⁾などいくつかの研究が挙げられる。だが、保護者の教育が反抗にどのような影響を持ちうるか、についての研究はほとんどないと言ってよい。そのような点からも、反抗の背後にある教育的要因を探る本研究は意義があると言えよう。

3 仮説

- 理論仮説1：反抗と自立心には明確な関連がない。
- 作業仮説1：保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える、とは言えない。
- 理論仮説2：反抗している子どもほど、生活満足度が低い。
- 作業仮説2：保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする子どもほど、日常生活全般が充実していない。
- 理論仮説3：自立心のある子どもほど、生活満足度が高い。
- 作業仮説3：ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える子どもほど、日常生活全般が充実している。

まず、問題設定の節で述べたように、現代の中学生における反抗は「抵抗」よりも「反発」というべきもので、自立心の発達を伴っていないのではないかと予測する。そのことを仮説1で検証する。また、反抗と自立が相関関係にないだけでなく、他の変数（この場合生活満足度）との関係においても違う性質を持っているということを仮説2および仮説3で検証する。反抗と自立は一括りにして語られることが多いが、仮説1～3からそのような語りが誤りであることを述べる。

- 理論仮説4：保護者とよく話をする子どもほど、反抗していない。
- 作業仮説4：保護者との会話頻度が高い子どもほど、保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりしない。

- 理論仮説5：保護者とよく話をする子どもほど、自立心がある。
- 作業仮説5：保護者との会話頻度が高い子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える。

次に、反抗と自立に影響を与えうる教育変数として、子どもがどれくらい保護者と話しているか、という指標を考える。そして、この教育変数が反抗に負の、自立心に正の影響を与えると予測する。これは仮説4および5に該当する。保護者による教育が反抗を緩和することがあるということを示すためだが、もしこの仮説が正しいことが証明されれば、先節で挙げた深谷ほか（2004）を乗り越えることができる。なぜなら、子どもと保護者との関係が良好であっても自立心が育つことがありうる、ということを示すことができるからである。

- 理論仮説6：保護者から非一貫的教育を受けている子どもほど、反抗している。
- 作業仮説6：同じことをしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする。
- 理論仮説7：保護者から非一貫的教育を受けている子どもほど、自立心がある。
- 作業仮説7：同じことをしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える。

また、反抗と自立には似たような側面もある、ということをここで確かめる。保護者に対する反抗が起きる契機として保護者からの教育を考え、そのうちの1つとして、保護者の非一貫的教育態度を想定する。それが子どもの反抗および自立心に正の影響を与えるのではないかと予測した。これは、保護者の

非一貫性によって保護者への矛盾もしくは非絶対性に気付き、反抗および自立心を喚起する、ということが考えられるからである。以上のことを仮説6および7によって検証する。

●理論仮説8：学力で統制しても、保護者から非一貫的教育を受けている子どもほど、反抗している。

○作業仮説8：学力が上位の子どもも中位の子どもも下位の子どもも、同じことをしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする。

●理論仮説9：学力で統制すると、学力が上位の子どもでは、保護者から非一貫的教育を受けている子どもほど、自立心がある。

○作業仮説9：学力が上位の子どもにおいては、同じことをしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える。

最後に、仮説6および7が正しいと実証されたとしたら、同じ非一貫的教育態度がどのような子どもに関しては反抗に影響し、どのような子どもに関しては自立心に影響するか、という疑問が浮かび上がる。統制変数を用いてそのことについて説明することを考え、学力という指標を取り上げる。これは、学力上位層と中下位層では保護者の矛盾への「気付き」に違いが生じる可能性があるからである。以上のことを仮説8および仮説9で検証するが、これによって非一貫的教育が学力に関係なく反抗に影響を与え、同時に学力によって非一貫的教育が自立に与える影響が異なってくる、ということ述べることであれば、仮説1～3が支持された場合に示される反抗と自立の相違性を補強することができるものと思われる。

4 変数の設定

本節では、分析の際作成した変数について説明する。

①保護者への反抗

Q46B「保護者の言うことに納得いかないと感じる」およびQ46C「保護者に話しかけられても返事をしないことがある」に「とてもあてはまる」と答えたものを4点とする。同様に「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点と点数化し、Q46BとQ46Cの点数を足しあわせた合計点が5～8点であったものを（保護者への反抗が）「ある」、合計点が2～4点であったものを（保護者への反抗が）「ない」と設定した⁴⁾。

②自立心

Q47C「ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を（自立心が）「ある」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を（自立心が）「ない」として、2段階の変数に設定し直した⁵⁾。

③生活満足度

Q10E「日常生活全般が充実している」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を（生活満足度が）「高い」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を（生活満足度が）「低い」として、2段階の変数に設定し直した。

④保護者との会話頻度

Q44「あなたは、次の話題について保護者とどれくらい話しますか」のA「学校の勉強や進路のこと」、B「保護者の仕事のこと」、C「友だちのこと」、D「遊びや趣味のこと」、E「自分の悩みごと」、F「あなたの幼いころのこと」、G「恋愛のこと」それぞれについて、「よく話す」を4点、「ときどき話す」を3点、「あまり話さない」を2点、「ほとんど話さない」を1点と設定する。その合計点が13～25点であったものを（保護者との会話

頻度が)「高い」、合計点が4～12点であったものを(保護者との会話頻度が)「低い」と設定した⁶⁾。

⑤非一貫的教育

Q45D「あなたが同じことをしても怒るときと怒らないときがある」を、「よくする」「ときどきする」を(非一貫的教育が)「ある」、「あまりしない」「ほとんどしない」を(非一貫的教育が)「ない」として、2段階の変数に設定し直した。

⑥学力

主要5教科の学習定着状況を尋ねるQ09「あなたには、次のことがあてはまりますか」について、○をつけた数が7～10個であったものを学力「上位」、5・6個であったものを学力「中位」、0～4個であったものを学力「下位」と設定した。

5 分析

まず、作業仮説1「保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える、とは言えない」を検証する。次の表1は、保護者への反抗と自立心の関係をクロス集計で表したものである。

カイ2乗検定の結果、2つの変数に統計的に有意な関連がない、ということが明らかになった。また、保護者への反抗がある層とない層で割合の差を見ると0.4ポイントであり、

関連がほとんどないと言って差し支えない程度である。よって、仮説1は支持された⁷⁾。

次に、作業仮説2「保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする子どもほど、日常生活全般が充実していない」および作業仮説3「ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える子どもほど、日常生活全般が充実している」を検証する。次の表2は保護者への反抗と生活満足度、表3は自立心と生活満足度の関係をそれぞれクロス集計で表したものである。

両者とも統計的に有意であり、保護者への反抗と生活満足度は負の、自立心と生活満足度は正の相関を持っていることが読み取れる。よって仮説2および仮説3は支持された。

それから、作業仮説4「保護者との会話頻度が高い子どもほど、保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりしない」および作業仮説5「保護者との会話頻度が高い子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える」を検証する。次の表4は保護者との会話頻度と保護者への反抗、表5は保護者との会話頻度と自立心の関係をそれぞれクロス集計で表したものである。

両者とも統計的に有意であり、保護者との会話頻度と保護者への反抗は負の、保護者との会話頻度と自立心は正の相関を持っていることが読み取れる。よって仮説4および仮説5は支持された。もちろん、この分析で示さ

表1 保護者への反抗×自立心

保護者への反抗	自立心		合計	N
	ある	ない		
ある (%)	60.0	40.0	100.0	(1769)
ない (%)	60.4	39.6	100.0	(1046)
合計 (%)	60.2	39.8	100.0	(2815)

有意差なし p=0.839

表2 保護者への反抗×生活満足度

Q46B・C×Q10E

保護者への反抗	生活満足度		合計	N
	高い	低い		
ある (%)	66.0	34.0	100.0	(1754)
ない (%)	73.8	26.2	100.0	(1043)
合計 (%)	68.9	31.1	100.0	(2797)

0.1%水準で有意 p=0.000

表3 自立心×生活満足度

Q47C×Q10E

自立心	生活満足度		合計	N
	高い	低い		
ある (%)	71.9	28.1	100.0	(1689)
ない (%)	64.2	35.8	100.0	(1108)
合計 (%)	68.9	31.1	100.0	(2797)

1%水準で有意 p=0.001

表4 保護者との会話頻度×保護者への反抗

Q44A~G×Q46B・C

保護者との会話頻度	保護者への反抗		合計	N
	ある	ない		
高い (%)	57.5	42.5	100.0	(1480)
低い (%)	68.9	31.1	100.0	(1304)
合計 (%)	62.9	37.1	100.0	(2784)

0.1%水準で有意 p=0.000

れたのはあくまで相関であって、「保護者との会話によって反抗が薄らぎ自立心が高まる」という因果関係を即座に読み取ることはできない。ただし、少なくとも、会話によって反抗が高まったり、自立心が薄らいだりするとは考えづらいことはわかる。

その次に、作業仮説6「同じことをしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする」および作業仮説7「同じことをしても怒るときと怒らない

ときがある保護者を持つ子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える」を検証する。次の表6は非一貫的教育と保護者への反抗、表7は非一貫的教育と自立心の関係をそれぞれクロス集計で表したものである。

両者とも統計的に有意であり、非一貫的教育と保護者への反抗および自立心は正の相関を持っていることが読み取れる。よって仮説6および仮説7は支持された⁸⁾。

最後に、作業仮説8「学力が上位の子ども中位の子どもも下位の子どもも、同じこと

表5 保護者との会話頻度×自立心

保護者との 会話頻度	自立心		合計	N
	ある	ない		
高い (%)	66.1	33.9	100.0	(1479)
低い (%)	53.7	46.3	100.0	(1305)
合計 (%)	60.3	39.7	100.0	(2784)

Q44A~G×Q47C
0.1%水準で有意 p=0.000

表6 非一貫的教育×保護者への反抗

非一貫的教育	保護者への反抗		合計	N
	ある	ない		
ある (%)	70.6	29.4	100.0	(1208)
ない (%)	56.8	43.2	100.0	(1600)
合計 (%)	62.7	37.3	100.0	(2808)

Q45D×Q46B・C
0.1%水準で有意 p=0.000

表7 非一貫的教育×自立心

非一貫的教育	自立心		合計	N
	ある	ない		
ある (%)	63.2	36.8	100.0	(1208)
ない (%)	58.1	41.9	100.0	(1599)
合計 (%)	60.3	39.7	100.0	(2807)

Q45D×Q47C
0.1%水準で有意 p=0.000

をしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、保護者の言うことに納得いかないと感じたり保護者に話しかけられても返事をしないことがあったりする」および作業仮説9「学力が上位の子どもにおいては、同じことをしても怒るときと怒らないときがある保護者を持つ子どもほど、ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える」を検証する。次の表8は非一貫的教育と保護者への反抗の関係を、表9は非一貫的教育と自立心の関係を、それぞれ学力で統制した3重クロス表である。

表8において、学力上中下位層すべてにおいて非一貫的教育と保護者への反抗に正の相関が見られ、統計的に有意となっている。表9においては、学力上位層だけでなく学力下位層でも統計的に有意となり、学力中位層のみ統計的に有意となっていない。よって仮説8は支持されたが、仮説9は部分的にのみ支持された。

なお、表9において学力下位層で非一貫的教育と自立心に統計的に有意な正の関係が見られた理由として、仮説の節で述べたような保護者の非絶対性への気付きとは異なり、

表8 学力×非一貫的教育×保護者への反抗

Q09×Q 45D× Q46B・C

学力	非一貫的教育	保護者への反抗		合計	N
		ある	ない		
上位	ある (%)	73.7	26.3	100.0	(453)
	ない (%)	56.6	43.4	100.0	(618)
	合計 (%)	63.9	36.1	100.0	(1071)
0.1%水準で有意 p=0.000					
中位	ある (%)	69.5	30.5	100.0	(315)
	ない (%)	59.5	40.5	100.0	(425)
	合計 (%)	63.8	36.2	100.0	(740)
0.1%水準で有意 p=0.000					
下位	ある (%)	68.3	31.7	100.0	(438)
	ない (%)	55.1	44.9	100.0	(552)
	合計 (%)	60.9	39.1	100.0	(990)
0.1%水準で有意 p=0.000					

表9 学力×非一貫的教育×自立心

Q09×Q 45D× Q47C

学力	非一貫的教育	自立心		合計	N
		ある	ない		
上位	ある (%)	74.6	25.4	100.0	(453)
	ない (%)	66.8	33.2	100.0	(618)
	合計 (%)	70.1	29.9	100.0	(1071)
1%水準で有意 p=0.006					
中位	ある (%)	60.5	39.5	100.0	(314)
	ない (%)	61.1	38.9	100.0	(424)
	合計 (%)	60.8	39.2	100.0	(738)
有意差なし p=0.874					
下位	ある (%)	53.1	46.9	100.0	(439)
	ない (%)	46.6	53.4	100.0	(552)
	合計 (%)	49.4	50.6	100.0	(991)
5%水準で有意 p=0.042					

「保護者は信用できない」という不信感から自分でやるしかないという自立心が芽生える、ということが考えられる。また、学力中位層において統計的に有意でない理由として、保護者の非一貫性から学ぶというよりもその一貫性に何らかの意味付けを行ってしまい、自立心が芽生えないままになってしまっ

ている、ということが考えられる。

しかし、いずれの理由付けもあくまで推測にすぎない。ここで重要なのは、保護者への反抗と自立心は非一貫的教育という同じ変数と正の相関を持つが、学力によって統制すると非一貫的教育と反抗および自立心の関係に違いが見られた、ということである。

6 結論

以上の分析から、以下のような知見が得られた。

- ①反抗と自立心にはほとんど関連がない
- ②生活満足度に対して反抗は負の、自立心は正の相関を持つ
- ③保護者と話すことは反抗には負の、自立心には正の相関を持つ
- ④非一貫的教育は反抗および自立心に正の相関を持つ
- ⑤④の関係を学力で統制すると、学力中位層では非一貫的教育と自立心に統計的に有意な関連がない

①より、中学2年生においては反抗と自立心にはほとんど関連がない、ということが示された。また②、③、⑤より、反抗と自立を一括りにして語るものが誤りである、ということも示された。つまり中学2年生では反抗していることによって自立心が育つ、ということとは考えにくく、むしろ冒頭でも述べたように「反発」と言ったほうが適当であろう。そのような時期を、果たして「反抗期」と呼んでしまってよいのだろうか。自立心の発達を伴うような「抵抗」と混同して「反発」を「反抗期」と表すことによって、子どもへの無理解・誤解を生むことになってしまうのではないだろうか。すなわち、自立とは無関係なところで保護者の教育——④より非一貫的教育など——によって反抗的態度を取っている子どもを「この子は今反抗期で自立しようとしているのだからそっとしておこう」というように捉えてしまう、といったことが考え

られるのだ。

③より、保護者とよく話す子どもでは保護者への反抗が緩和され、かつ自立も促されるということが明らかにされたので、保護者が自ら子どもと話す機会を手放してしまうのはもったいないと言える。もちろん、保護者に対して反抗的態度で接してくる子どもと話せ、と言われたところで簡単にはできないということも事実である。しかし、②より反抗と生活満足度は負の相関、すなわち反抗があるほど生活満足度も下がるという傾向にあるので、保護者と話すことは結果として子どもの精神衛生面にもプラスの影響を与える、と考えることができる。以上から、中学2年生のことを表すのに「反抗期」という言葉を使わない、あるいは「反発期」というような別の表現を用いることと、保護者は反抗的態度を取る子どもであってもできるだけ話すよう試みることを、本稿からの社会に対する提言としたい。

なお、本研究のこれからの課題として、今回取り上げた教育態度以外に反抗に影響する保護者の教育態度、あるいはまったく別の外部要因を探し、反抗が生じる仕組みについてさらに詳しく研究する必要がある、ということが挙げられる。また、今回の調査には中学2年生の現在の状況しか分析できないという限界があり、現在は「反発」だが将来的には反抗と自立が関連するかもしれない、と考えることも可能である。そのため、学年横断的な調査、あるいは1学年の追跡調査によって反抗を巡る環境をより広範に正確に捉えることが今後の課題である。

<注>

- 1) この研究では、自己実現の指標として「私は自分の気持ちにしたがって物事を決めることが多い」などの「自己志向」や、「状況をあれこれ考えるよりも、率直な気持ちをだすほうが大切なことがよくある」などの「率直な自己表現」が挙げられている。
- 2) この研究では、学校への不適応傾向尺度として「学校では、みんなの中うまく入れない」などの「孤立傾向」や、「授業中、つまらなくなって教室をぬけだしたことがある」などの「反社会的傾向」が挙げられている。
- 3) この研究では、中学生の精神的健康の指標として「よく何の理由もなく急におびえたりする」などの「神経症傾向」、「人から指図されると腹が立つ」などの「怒り」、「人は私を十分認めてくれない」などの「非協調性」が取り上げられている。
- 4) なお、両変数のアルファ係数は0.431で合成するには低い値である。しかし、情緒面での反抗と言えるQ46B、

ならびに行為面の反抗と言える Q46C の両側面を捉えるため、あえて加算して分析を行った。また、Q46B および Q46C をそれぞれ独立させて分析を行っても同様の結果が得られた。

- 5) 『大辞泉』によれば、自立心とは「他の力や支配を受けずに、自力で物事をやっつけようとする心構え」である。Q47C が自立心を完全に表している指標であるとは言い難いが、自立心の一面を捉えることに成功していると考えられる。
- 6) 変数の加算に際してのアルファ係数は 0.794 であるため、加算しても支障はないと考えられる。
- 7) Q47C と似たような自立の指標である Q47B 「わからないことや知らないことがあるとまず自分で調べる」でも以下と同じ分析を行い、ほぼ同様の結果が得られた。
- 8) Q45D と同様の内容を保護者に尋ねた質問である H Q 16D 「あなたと子どもで意見が違ふとき、あなたの意見を優先させる」でも仮説 6 および仮説 7 と同じ分析を行った。その結果、H Q 16D と反抗には 0.1% 水準で統計的に有意な正の相関があり、H Q 16D と自立心には統計的に有意な関連が見られなかった。親側のこのような意識が自立と関連するとは言えないということは、深谷ほか (2004) で述べられていた「自立を促すために親は弱みを見せなければならない」という意見が必ずしも真実ではない、ということを示唆していると言えよう。

<引用文献>

- 平山聡子、2001、「中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連——父母評定の一致度からの検討」『発達心理学研究』12(2): 99-109.
- 深谷昌志編、2004、『中学生にとっての家族——依存と自立の間で』ベネッセ未来教育センター.
- 小坂圭子・山崎晃、2002、「中学生の自己実現を考える(2)——親の自己実現及び養育態度との関連から」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域』50: 469-76.
- 松村明監、1995、『大辞泉』小学館.
- 西平直喜、1990、『成人になること』東京大学出版会.
- 小沢一仁、1991、「親への反抗と青年期の心理的離乳」『帝京学園大学研究紀要』4: 47-55.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則、2002、「中学生の親および親友との信頼関係と学校適応」『教育心理学研究』50(1): 12-22.
- 山本多喜司監・山内光哉編、1991、『発達心理学用語辞典』北大路書房.